傘はなくても雨は降る

傘をどこかに忘れてくるのは、私の得意技のひとつである。妻は心得たものであまり高価な傘は買ってくれない。いままでになくした多くの傘のことを考えると、不平は言えない私の立場である。傘をなくすのは私の不注意だけでなく、天候にも責任はあると思っている。私が帰宅するまで雨が降り続いていれば忘れることもないのにと思うのである。天気がよくても悪くても、空に向かって文句のいいようもないので、もっぱら天気予報のせいにする。雨の後晴れ、などというから晴れるのだとついテレビに文句をいいたくなる。

私は買物が苦手である。自分で喜んで買いにゆくのは本ぐらいである。妻と買物にゆくと「あなたと一

緒だとせかされて、ゆっくり品物を選べない」と文句を言われる。あれこれショー・ケースから取り出させたあげくなにも買わないで引き揚げるという芸当は、女性でなければできない。その点私などはあわれなものである。偶然手にしたネクタイを買い、一度も使用しないものもある。店員がすすめたらそれを買い、後悔することも多い。万一、妻に先立たれるようなことにでもなったら炊事、洗濯、掃除はともかく、買物の点で致命的打撃を受ける。いろいろ考えた揚句、私が先にあの世へ旅立つことを心秘かに決めた。以来随分と気が楽になりお茶もコーヒーも一段と旨く飲めるようになった。

久しぶりに佐世保の書店まで出かけた。目的の本を探すのに随分と時間がかかった。書店の入り口の投げ入れの傘立てに置いていた筈の私の傘がないのに気がついた。外はかなりの雨が降っている。親切そうな女店員さんを選び自分の傘がないことを告げた。「お客さんすみませんが自分の傘をちょっと、とって下さい」と店内の人々に声をかけてくれた。そして残った一本の傘を私に差し出し「これで我慢して下さい」と頭を下げた。私はお礼を言って書店を出た。かなり上質の新しい傘であった。帰宅して妻にそのことを告げたら、呆然とした顔つきになり、次には笑いこけた。家を出る時には雨は降っていなくて、傘は持って行かなかったと言うのである。調べて見るとなくした筈の私の傘は玄関の傘立てにあった。

小学校の一年生になった早々、読み方の教科書でミノカサ、カラカサという文を教わった。いまどきミノカサやカラカサを知っているこどもはいるだろうか。そんなことを考えているうちに傘に関する幼い頃の出来事を思いだした。雨が降ると必ず学校を休む友だちがいた。傘がないので学校へ行けないのである。翌日はきまって担任の先生からひどく叱られていた。貧しくて傘を買ってもらえないとは恥ずかしくて言

えず、頭が痛かったとか、腹が痛かったなどと小さな声でぼそぼそ言っていた。

何十年か前までの貧乏には食事も満足に得られないものがあった。私たち年代の人たちは多かれ少なかれ貧乏の記憶を持っている。たとえ自分の家は貧しくなくても、まわりには貧乏があった。「一杯のかけそば」に見られるような医者になったりする幸せにめぐまれることもなく、貧しいままに生涯を終えた人々を見聞している。

学校の昼休みになると弁当を持たぬ幾人かの子らは、窓際に相寄りうつろな眼で運動場を見ていた。博打は打つ、酒は飲む、心荒れた亭主を事故で亡くした彼の母は「どうせ生きてる値打ちのない母子たい」と口癖のように言っていた。暗い裸か電球の下にむかい合う母と子の姿がいまでも眼に浮かぶ。彼が話すことはみんな富へのあこがれであった。どんなに辛かろうと、それを聞いてくれる身寄りはいなかったし、話す気力もなかった。軒は垂れ壁も落ちるがままの世に忘れられたような孤独な人生がそこにはあった。まだ幼かった私たち仲間は彼の粗末な衣服や日の浦の海岸で拾ったと思える下駄などを嘲笑した。みんながはやしたてると、自分も仲間に加わりそれに輪をかけるような言葉ではやしたてた。彼は反抗することもなく悲しそうな目で、子供たちの群をいつも見つめていた。

末っ子の私は随分と父母に可愛がられた記憶が多いが、ある日父から呼びつけられひどく叱られた忘れることのできない思い出がある。育つ環境を侮辱して友を苦しみに落とすという卑劣なことは、人としてどんなに恥ずかしいことか、というような意味の言葉で長いこと説教をされた。私は幾度もうなずきながら胸のうずきのようなものを覚え、顔を上げることができなかった。体中が熱くなり自分の頬が引きつっ

ているのがわかった。

父は真新しい一本の傘を私に渡し、彼の家に持って行けと言う。反抗を許さぬきびしい父の顔であった。雨の中、少し古くなった自分の傘をさし新しい傘を持って彼の家を訪れた。目が合った時、彼の顔にかすかな輝きが走った。彼は「おおきん」とかすれた声で言った。以来、雨が降っても彼は学校を欠席することはなかった。

人生の中で経験する別れというものは、さまざまなものがある。何でもない別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなってしまった場合もある。島で育った私は船の別れが殆どである。船の場合、自動車や汽車と違い実にゆっくりと港を出る。艀に乗り渡海船に移っていたあの頃は別れのさみしさを殊更強く感じたものである。それは全く関係のないものが傍らから見ていても、さみしい光景ではなかったかと思う。ようやく陽の昇った静かな朝の海に、艀の櫓の音がだんだん小さくなって、渡海船に乗り移ると「ポーッ」と別れの汽笛を鳴らし、遠ざかってゆく。海岸で見送っている人たちは立ったまま、じっとその船を見ているが、こういう別れ方は、長い間心に残るものである。船の別れについては忘れることのできない思い出がある。

私は昭和十七年に召集を受け、陸軍の船に乗り東南アジア各地をまわった。昭和十九年の秋、マニラから門司に寄港したことがある。小雨の降る夕暮れの門司港での出来事である。出港前の輸送船の甲板上に年の頃まだ十五・六歳の少年兵の一団が、岩壁の方に向かって直立不動の姿勢をとり挙手の礼をしている姿を発見した。私は誰かに別れの挨拶をしているのかと思い埠頭のあたりを見渡したが、全く人影はなか

った。その時私はハッと気がついた。この少年兵の一団は知人や家族に別れを告げていたものではなく、祖国日本に最期の別れを告げていたのである。この少年兵を乗せた輸送船団は南方の戦場に到着することなく、バシー海峡の藻屑と消えたとセブの港で聞いた。以来四十余年たった現在でもこの少年兵の最期の姿が、いろいろな意味を込めて鮮烈に私の胸を打つ。現在の青少年たちとのあまりにも、大きな違いに何ともいいようのない気持になるのである。

彼が県外のお寺の小僧さんになるという話を聞いたのは、四年生か五年生の夏休みだったと思う。「あの子だったら、どんな厳しい修行にも耐えられるだろう」と私の父母が話していた。そうしなければ食ってゆけない日もある人生だったのだろう。彼が島を去る日、私は母と日の浦の海岸まで見送りに行った。母はお守りと幾らかの銭を彼のふところに押し込んだ。彼は別れに際しても涙は流さなかった。いつのまにか自分の悲運な境遇を諦めていたのであろう。小さな肩に古びた柳行李を背負い島を去ってゆく彼の後ろ姿に、母親はどんな思いを抱いたであろうか。付き添いの眼光鋭い僧侶に私の母は幾度もお辞儀を繰り返していた。

危なっかしい足どりで艀に乗る彼を私は無言で見送った。彼も最後まで沈黙を守った。彼は一度も振り向かず、私はさよならが言えなかった。海の色はくすんでいたが、波は穏やかだった。わずかばかりの金がないために彼がこうむった悲しみと寂しさを思うと、切ない気持になった。彼の母親は渡海船が見えなくなっても海岸から離れようとはしなかった。

当時どこの村にもひとつやふたつころがっていた悲劇を背負って、眩しい朝の光のなかを彼は島を去っ

て行った。これも生き延びるための正しい選択だったのだ。そう思う。彼は島に残るよりもずっとましな人生を送ることになるだろうと思った。島を離れることがこの母と子の唯一の生きる道だったに違いない。

東北地方の寒村で「娘さんを売る前に役場に相談して下さい」という紙が貼られていた時代であり「早く死ねばこんな飢きんにあわなくてもよかった」と多くの老人がくやんだ時代でもあった。

昭和五十八年私は彼と会った。一見して彼が戦場から故国へ戻ってくるまでの何年間かは、想像を絶する日々だったに違いないと思わせる身体になっていた。「シベリヤにいた」それだけで多くは語らなかった。座ることができない為に僧籍にもどれなかったと言う。私の父母の墓の方向を尋ね、聞き覚えのある浄土真宗のお経を小さな声で唱え出した。「ほんとうに人の心の痛みのわかる方だった」と言い、顔を赤らめながら一本の傘を私に渡した。何かをいっても言葉にならないような気がして、固い握手を交わした。

いかに保守的と言われようとも「現在の自由と平和は戦時中の幾百万人の若人の犠牲の上に立ったものである」という自分の思いは消えることはないと語り、ともかく生きている。死に脅かされることもない。食べるために懸命だった少年時代も今は懐かしい想いさえするとも言った。

かつての青少年の犯罪は、貧困と親のいない家庭に多かったが、現在では中流階級以上の家庭で多く発生していることについて、世相の変わりように衝撃を受けると沈んだ声で語り、彼は島を去って行った。

辛い過去、悲しい想い出、孤独感をもちながら、しかし温かさ、やさしさを忘れずに懸命に生きている彼に接して、胸の奥から突き上げてくる熱いものをどうしようもなかった。不自由な身体で島を訪れた彼のやさしさに心打たれ、その夜はなかなか寝つかれなかった。父母がそばにいて、その慈愛に包まれて育

った者であっても、情念ゆたかな志を抱くとは限らない。生れ育った土地の風土、人情がひとりひとりの性格の一部をこしらえるという、一つの見方を私がするようになったのはこの頃からである。